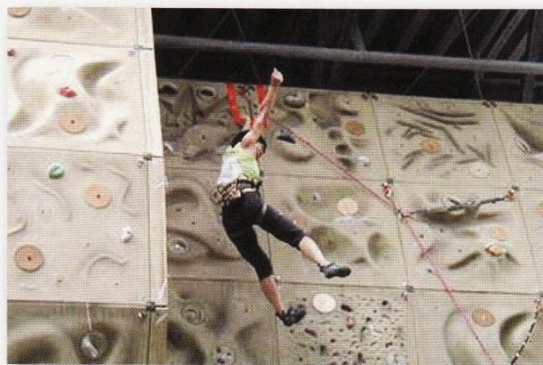
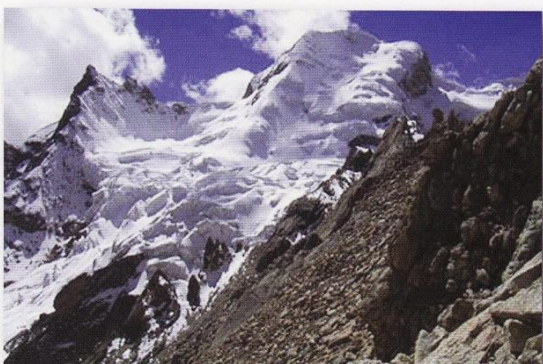
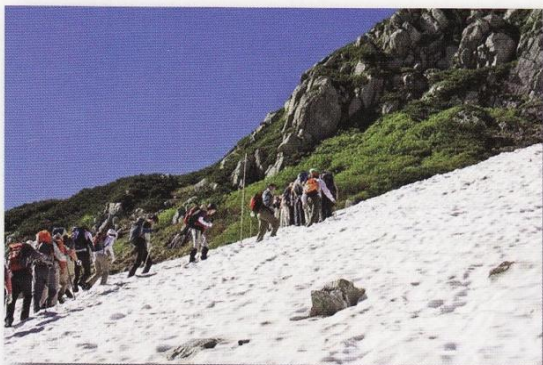


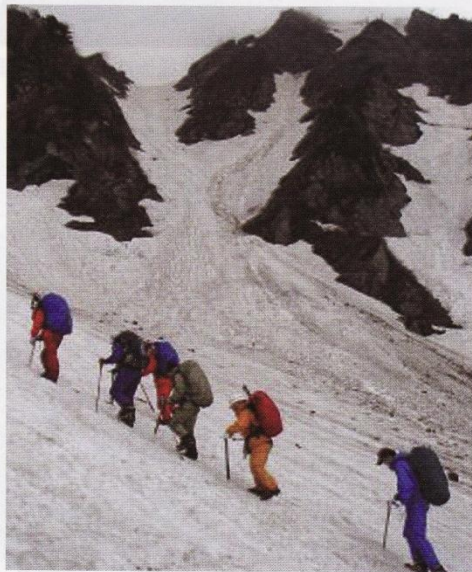
# 山形県山岳連盟60周年記念誌

2010年11月

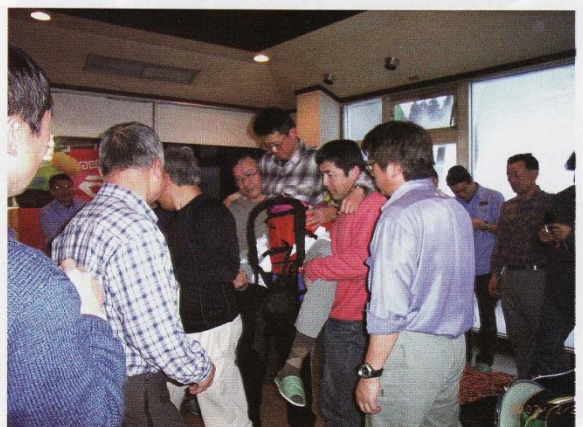


山形県山岳連盟

# 山形県山岳連盟10年の足跡



2004年及び2007年5月に実施された飯豊連峰石転ピ沢における指導員会、遭難対策委員会春山合同訓練より



2007.2 指導員研修会

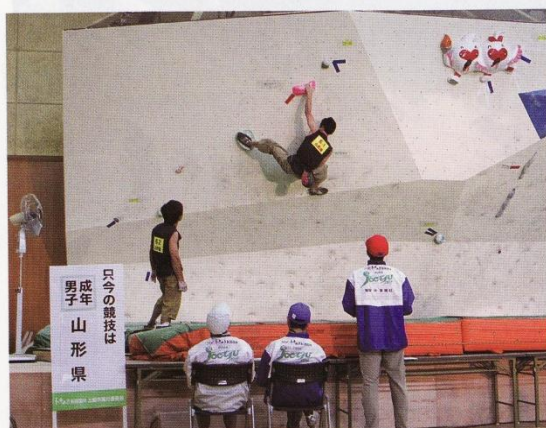
# クライミング競技会



2004.10 チャレンジスポーツ教室より



2010.7 第37回東北総体リード競技



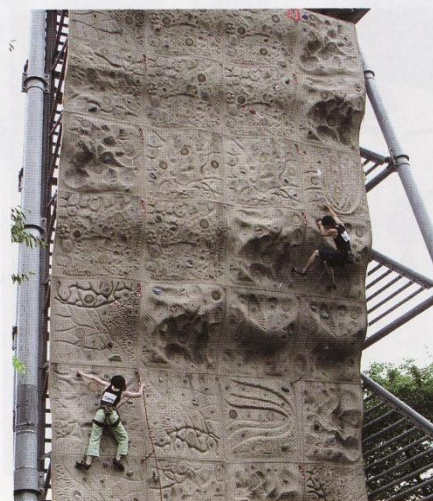
2009.10 新潟国体ボルダリング競技



2006.8 宮城県で開催された東北総体 本県選手役員団

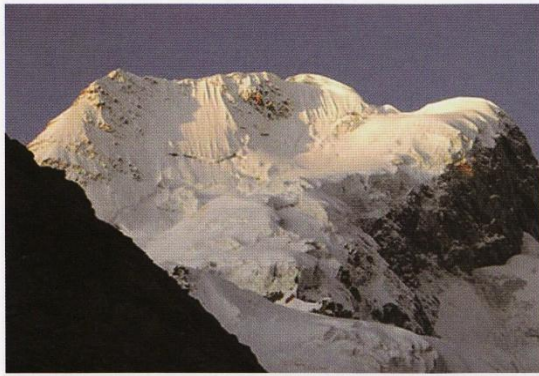


2010.7 第37回東北総体ボルダリング競技



2010.7 第37回東北総体リード競技中の少年男女選手

## 海外登山より



2007.9 ヤラシャンポ主峰



2007.9 ヤラシャンポベースにて



各種研修会・総会



2010.10 日山協安全登山の集い 栗駒山にて



2010.10 千葉国体にて 田中日山協会長と



## 会長挨拶

山形県山岳連盟会長 清野 孝

山形県山岳連盟は創設60周年を迎えることができました。ここに関係する皆さんと心からお祝いと喜びをわかちあいたいと思います。

昭和25年（1950年）、当時は食べる物も、身にまとう物も、交通機関も、現在と比べものにならない不自由な生活をしいられた時代と聞いております。このような生活環境や社会環境の中に本県山岳連盟は誕生し、以来登山という行為に生きる希望と明るい未来と、そして未知への挑戦、果てしない困難と厳しさを求めた登山が営々と行われてきました。

登山がある意識をもって行われるようになった歴史は、古来からの山岳信仰登山以降だといわれており、各地の修験道を中心に隆盛を極め、霊山や霊場、霊地として長く日本人の山岳感に根付いてきました。明治初期欧米人によって近代登山がもたらされてから、国内の主要山岳はあいついでその姿を紹介されるようになり、明治38年山水紀行文家や植物学者らにより日本に初めて山岳会が創設されました。更に大正から昭和のはじめには大学山岳部や高等学校山岳部の活動が大きく伸長発展し、現在までその姿を大きく変え、より充実した登山が行われてきました。

昭和31年日本のマナスル登頂によって一気に社会人山岳会の活躍が目立ち、ヨーロッパやヒマラヤ登山を目指す登山者が増加し登山ブームが巻き起こりました。現在では経済基盤の確立や情報化社会の成熟、更に健康志向への欲求などその達成感を求めるために、名山ブームとか中高年登山ブームとかに代表されるように、登山は幅広くより深く行えるように底辺が拡大しております。

平成12年（2000年）11月山形県山岳連盟は創設50年を迎え盛大な記念行事を開催しました、当時の稲泉会長は挨拶の中で『その長く、遠い、道のり』と題して50年間を振り返えられ、本県山岳連盟が県の山岳史に輝かしい足跡を残したと評価されました。

以降10年、より一層内容が個別に複雑化する国民体育大会山岳競技の大きな変貌、組織内登山活動の衰退、ガイド登山やツアー登山の増加による新たな登山形態への対応、人間本来の自由にしてほしい、束縛されたくないとして組織加盟や維持が大きな課題とされる未組織登山者との連携、遭難事故の形態変化や多発、自然環境の大きな変化により自然に対する関心が大きく高まっている反面、人々の権利意識の拡大や、欲求意欲の増大など、抱える課題や問題が山積されるなか、新しい歴史に何を求め、何が残せるのか難しいときではありますが、教える・教わるの立場の違い以外、全ての条件の中自己責任において参加するものが登山であり、登山中において異常環境を作らない、正しくものを見て、正しく判断できることが指導者でありリーダーであると言われてます。

山形県山岳連盟は今後も加盟各団体は勿論、関連する関係機関団体との連携を更に深め、より困難とより厳しさと、歩んできた近代登山の登山行為を更に、継承発展させていくことに努力していくことを誓い挨拶とします。

## 編集後記

山形県山岳連盟創立50周年記念誌を開いて見ると年表が平成12年(2000年)で止まっている。あれから10年あつと言う間の時間であった。事務局が置賜から庄内、村山を経て再び置賜に移り、この10年間登山界を取り巻く環境は大きく変化してきた。本連盟でも大きな山岳会が次々に退会し、いやでも組織力が衰退してきたことは否めない。

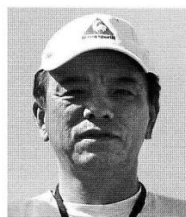
この記念誌は60年間を土台にした山形県山岳連盟の将来像を模索したい、いわゆる『温故知新』となるようでありたいと感じている。それぞれの立場の方々に多くの原稿を依頼し書いていただいた。読ませていただくと当時の記憶がほんやりと浮かび、まさに一時代が過ぎ去ったと感じられる。この間関係した加盟団体の皆さんはじめ多くの先輩諸兄にお知恵を拝借したり、参考となる文献を読ませていただいたことでこの記念誌は出来上がった。編集内容は充分満足のいくものとはいえませんが、現在本連盟がおかれている現状が理解できるものと思います。

山形県山岳連盟は創立以来多くの皆さんに支えられながら成長してきました。特に山形県教育委員会をはじめ山形県警察本部、日本山岳協会、県体育協会、山形新聞社、山形放送株式会社様などをはじめとして、数多くの皆様方に様々なご支援とご指導をいただきました。ここに心から深く感謝申しあげ本県を代表する山岳団体として今後も尚一層安全登山に努めていくことを申しあげ編集後記といたします。

### 『参考文献』

日本山岳協会記念誌・山形県山岳連盟50周年記念誌・加盟各団体発刊記念誌を参考としました。

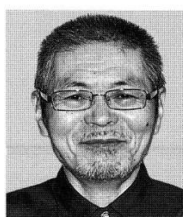
## 実行委員会の顔ぶれ



佐々木実行委員長



青木理事長



平田事務局長



長谷川事務局員



平田事務局員

### 表紙説明

左上 (2010.7) 県民登山大会 浄土山を目指して

右上 (2010.7) 県民登山大会 室堂山手前より五色ヶ原、薬師岳を望む

左下 (2007.9) 中国チベット登山隊ヤラシャンボ主峰を望む

右下 (2005.9) 第32回東北総体秋田大会クライミング競技で完登した成年女子本田選手